

りよい生活や人間関係を築く子どもの育成 ～「学級目標」を活用し、共同体感覚を高める実践を通して～

教育実践応用領域 学級づくり履修モデル

岩本 歩

I はじめに

1 研究の動機

「よりよい生活や人間関係を築く子ども」とは、子どもたち個々が抱える自分自身の生活や人間関係の課題を解決していける子どもと私は考える。

そういった子どもを育てるには、子ども自身で課題を解決した経験が必要である。これまで私は学級で起きる子どもたちの生活や人間関係の課題(いじめ、男女の対立、グループの固定化等)を解決するために、共通の目標である学級目標をつくり、それを達成していく集団活動の実践をしてきた。学級目標を達成していく集団活動の中で、子どもたちは生活や人間関係の課題を見付け、解決していった。

学習指導要領によると、「よりよい生活や人間関係を築こうとする」ことは、「自分の所属する集団への所属意識をもち、集団の一員としての自覚をもって生活の向上のために進んで貢献していこうとする社会性の基礎」であると示されている。

私はこれまでの実践で、子どもたちが生活や人間関係の課題を解決していく過程で、個々の子どもに、どんな社会性が育っているのか、どんな社会性を育てていくべきか具体的には分からなかった。育てていくべき社会性について、もっと具体的に理解して、実践を構築していくことで、よりよい生活や人間関係を築く子どもを育てていけるのではないかと思った。それが、本研究を進めるに至った私の最初の動機である。

どんな社会性を育てていくべきかという悩みに示唆を与えてくれたのが、「共同体感覚」である。共同体感覚とは、アドラーの個人心理学における中心的概念である。

会沢(2014)は、「共同体感覚とは、自分の所属する共同体に所属感や貢献感があり、互いが安心感で満たされ、協力原理で結ばれた意識」と定義し、「精神的健康のバロメーターである」と述べている。また、「アドラー心理学では、共同体感覚の欠如が様々な問題行動や精神病理の原因と捉え、心理療法、カウンセリング、教育の目標は、「共同体感覚」を育むことであり、「共同体感覚」は協力的な人間関係を築く社会性である」と紹介した。

本研究では、育てたい社会性をアドラー心理学の「共同体感覚」と考えて、研究を進めていこうと考える。

2 子どもをとりまく社会情勢

折出(2001)は、現代社会において、「あらゆるところに市場原理が浸透し、大人も子どもも比べ合うことが多く、競争が進んでいる。特に大人の間には目に見えない競争が強まっている。非正規雇用、早朝出勤、深夜残業、賃金格差など、日々の生活に追われている大人がととも増えてきている。」と述べている。こうしたことが原因で、子どもと落ち着いて関わる機会が減り、子どもに対する心理的虐待・身体的虐待の傾向が家庭内に拡大するとともに、子どもの心の中に潜在的な暴力性が強まり、「荒れる」・「キレル」・「いじめる」という行為につながっていると考える。現代社会は、子どもたちの間に協力原理で結ばれた「共同体感覚」が育まれにくい情勢となっている。

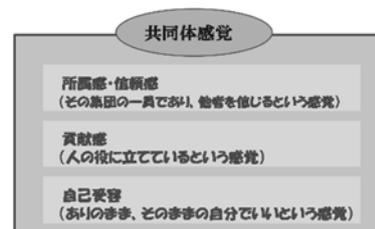
II 先行研究と本学級の実態

1 先行研究について

(1) 共同体感覚について

野田(1998)は、共同体感覚の定義は困難であると述べた上で、共同体感覚を構成する4側面を示した。それらは、所属感(その集団の一員であるという感覚)、信頼感(他者を信じるという感覚)、貢献感(人の役に立っているという感覚)、自己受容(ありのまま、そのままの自分でいいという感覚)である。

高坂(2011)は、野田の4側面を基に共同体感覚の尺度を作成した。因子分析の結果、4側面と精神的健康、学校適応感、劣等感との相関関係が明らかになり、野田の構成概念の妥当性が示された。そして、4側面を「所属感・信頼感」・「自己受容」・「貢献感」の3つの要素に再構成し、児童の共同体感覚が高いほど、よい生活や人間関係を築く子どもになっていることを明らかにした。(図1)また、高坂(2014)は、小学生版共同体感覚尺度を開発し、小学生の共同体感覚の測定を可能にした。



【図1 共同体感覚の3つの要素】

(2) 学級目標の活用について

学習指導要領の特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して」という文言から始まる。また、「望ましい集団活動」の条件として、子どもたちが活動の目標を全員でつくり、目標達成の方法や手段を考え、個々が役割の理解をして実行し、振り返りを行うことが挙げられている。学級活動において、子どもたちが目標達成に向けて様々な活動をしていく際、その最も基底になるのは学級目標であると私は考える。

このことに関して私に示唆を与えてくれたのは、赤坂（2015）である。赤坂は学級目標の活用について「学級目標という共通の課題が提示されることで、それを解決しようとする時に協力が起きる。協力していく中で、子どもたち個々が学級目標に関わった態度・価値観・スキルを学ぶことができる。」と述べている。つまり、赤坂は子どもにとって必要とされる社会性を、学級目標の課題に取り入れることで必要とされる社会性を獲得させられると考えている。

2 先行研究の問題点

共同体感覚についての先行研究は、尺度の有意性を論じる研究が多く、小学生を対象とした実践を伴う研究は乏しい。また、学級目標を活用して、具体的な社会性を育てていくことを実証したものを見付けることはできなかった。

3 本学級の実態（6年生 32人）

本学級の子どものは、素直で明るい子どもが多く、どの活動にも積極的に取り組むことができる。一方で、校外で遊ぶために学校を休んだり、教師やクラスの友達と衝突して暴言を吐いたりすることがある。誰かに仲間外れにされたり、陰湿な悪口を言われたりするなどのいじめの経験のある子どももいる。また、本学級には、昨年度まで年間65日欠席のA児（男子）・年間47日欠席のB児（女子）が在籍している。A児・B児ともに、これまでの小学校生活でよりよい生活や人間関係を築いてきたとは言い難い。

本学級の子どもの共同体感覚（高坂（2014））、学級目標に対する意識を質問紙で調査（ともに5件回答）すると表1のようになった。

【表1 学級の共同体感覚に関する調査 4月】

	所属・信頼感	貢献感	自己受容	学級目標
4月	4.2	3.6	3.8	4.0

学級目標を意識して達成できていない子どもほど、共同体感覚の数値が低いことが分かった。

（学級目標に関する数値と共同体感覚の3要素の間の相関係数は、0.70から0.80の間で、いずれも強い相関が見られた）また、学級目標を意識して達成してきた子どもは、共同体感覚が高いことが明らかになった。一方、貢献感が他の項目と比べると低い。これは、学級生活における課題を解決した経験があまりなく、学級のために自分が貢献できた実感する機会がもてていなかったことが原因ではないかと考える。

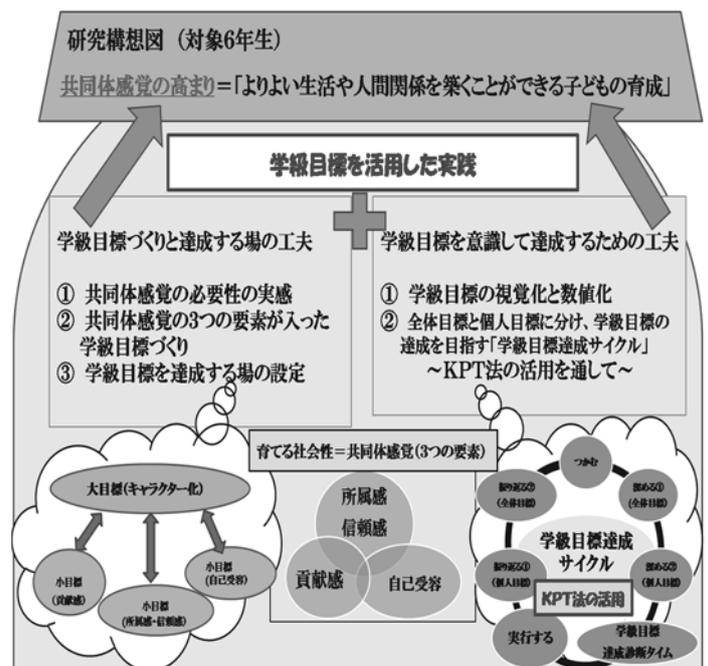
実態調査から、学級目標を意識して達成できる子どもを育てることを通して、共同体感覚が高められる可能性が明らかになった。

III 研究主題の設定

1 研究主題

本研究では、共同体感覚の3つの要素をそれぞれ育てていくことで、子どもたちの学級における共同体感覚を高めることを目指す。その実現に向けて、「学級目標を活用」していくこととし、「学級目標作りと達成する場の工夫」と「学級目標を意識して達成させるための工夫」を手だての中心とする。

共同体感覚の3つの要素を取り入れた学級目標を意識し、その達成を目指して活動していくことを通して、子どもたちの共同体感覚が高まり、「よりよい生活や人間関係を築くことができる子どもの育成」につながる（図2）



【図2 研究構想図】

2 研究仮説

- (1) 学級目標に共同体感覚の3つの要素を取り入れ、学級目標を意識して達成させていくことで子どもたちの共同体感覚を高めることができるだろう。
- (2) 共同体感覚が高まるほど、よりよい生活や人間関係を築くことができる子どもを、育てることができるだろう。

3 検証方法

高坂が作成した小学生版共同体感覚の尺度を使った調査と学級目標に関する意識行動調査について分析し、検証をする。(研究仮説①)

高坂が作成した小学生版共同体感覚の尺度を使った調査と児童の行動、記述内容を分析するとともに対象児童を決めて検証をする。(研究仮説②)

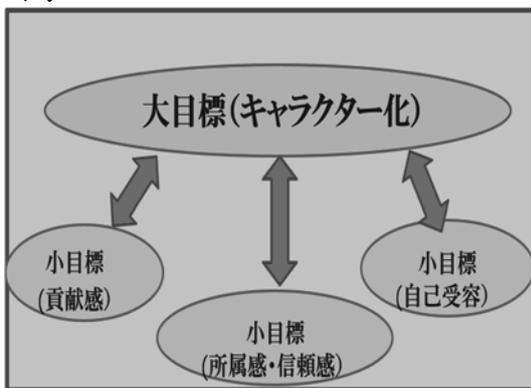
IV 研究の手だて

1 学級目標づくりと達成する場の工夫

(1) 共同体感覚の必要性の実感

学級開きに、共同体感覚の3つの要素をそれぞれ仮の学級目標として提示する。その上で3つの要素をそれぞれ達成することができるアクティビティを行う。このアクティビティを通して、学級目標をつくることの必要性和、3つの要素の必要性を実感させる。

(2) 共同体感覚の3つの要素が入った学級目標づくり



【図3 共同体感覚を育む学級目標の構成】

まず、共同体感覚の3つの要素を学級目標の小目標に取り入れることで、学級目標の達成と共同体感覚の関連性を明確にする。学級目標づくりをする前に、教師が作成した仮の学級目標にある共同体感覚の3つの要素の良さを子どもたちは実感している。そのことを踏まえた上で学級目標の小目標づくりを行う。出された子どものアイデアを教師が分類し、言葉のイメージを子どもと合わせながら小目標を作成する。(図3)

小目標が完成したら、大目標をつくる。大目標はキャラクター化をする。赤坂(2015)は、「キャラクター化は、凝集性を高めることができ、子どもが学級目標を身近に感じる。」と述べている。大目標をキャラクター化し、学級目標を達成する活動意欲を高める。

(3) 学級目標を達成していく場の設定

学級目標を達成していく場を設定する。達成していく意欲や達成感を高めるために、意識する集団を学期ごとに段階的に大きくしていく。1学期は児童会主催で行われる「赤星っ子夏祭り」(6年生と一年生がペアになり、教室で行う集会)の実施・運営を行う場を設定する。2学期には、学年集会「6年生の秋祭り」の実施・運営を行う場を設定する。

この2つの場は、子どもが意欲的に活動しやすい場であり、学級目標の達成に向けて取り組むのに適切である。

2 学級目標を意識して達成するための工夫

(1) 学級目標の視覚化・数値化と達成する場

子どもたちのアイデアを基に、学級目標を視覚化した掲示づくりをする。(図4)

掲示には、学級目標の達成度を数値化して表わせるようにし、いつでも子どもたちが把握できるようにする。また、達成度を表すポイントは、学校行事、学級集会など学級目標を達成していこうと学級全体で決めた取り組みの振り返りの際に1人1ポイント加算できるようにする。加算式にすることで、学級の成長の積み重ねを実感させ、活動意欲を高める。



【図4 学級目標の視覚化・数値化する掲示の例】

(2) 全体目標と個人目標に分け、学級目標の達成を目指す「学級目標達成サイクル」～KPT法の活用を通して～

つくった学級目標の小目標・大目標を集団としての目標と考え、「全体目標」とする。小目標・大目標に対して子どもたちがもつ個々の目標を「個人目標」とする。本研究では「個人目標」の達成を重視し、その積み重ねによって「全体目標」の達成を図っていく。

実際に学校行事・学級行事などの取り組みを行う際には、学級目標の達成に向けて図5のようなサイクルで活動していくことにする。



【図5 学級目標達成サイクル】

① **つかむ（課題の把握）**

それぞれの小目標を達成できる活動を考え、個々でワークシートに記述する。

② **深める①(全体目標に関わる)**

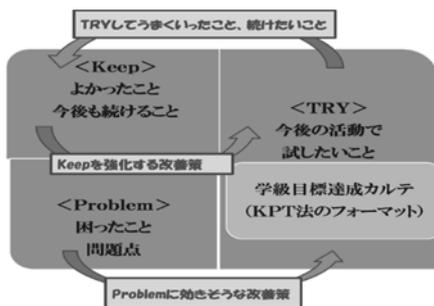
図6のような板書構成「学級目標達成チャレンジツール」を使って、どんな活動がどの小目標を達成できるか考えながら話し合う。そして、学級目標と関連付けた活動提案を決める。

活動提案	信頼	全力	笑顔
バスケットボール	○	△	△
あめ食べ競争	○	△	△
障害物リレー	○	△	△
アスレチックどら	○	△	△
あめ食べ競争リレー	○	△	△

【図6 学級目標達成チャレンジツール】

③ **深める②（個人目標に関わる）**

学級目標達成カルテを活用して、個人目標の達成を意識させる。学級目標達成カルテは、KPT法と呼ばれる「Keep」「Problem」「Try」の視点で物事を考える思考フレームワークを基に作成した。振り返りで挙げたProblemに対して、Tryを考え、そのTryを実施して効果があるならば、今後も続けていくということでKeepにする。また、Keepの中でよりよいものに改善したい案をTryの案にして考えることも行う。深める②では、深める①で決まった活動提案に対し、できそうなTryを考える。学級目標の小目標ごとに、1つの個人目標を考える。



【図7 学級目標達成カルテ (KPT法)】

子どもたちが具体的に意識して行動し、個人目標を達成していくことができるようにする。

また、活動提案に合わせて、個人だけでなく適宜グループや学級全体で行っていく。

④ **学級目標達成診断タイム**

学級目標達成診断タイムでは、活動本番前にリハーサルを行う。リハーサルを行うことで、課題をより明確化し、達成する意欲を高める。

学級目標達成診断タイムでは、深める②で考えたTryを実行する。実行後に、ProblemやKeepを考え、新しいTryを決め、本番に向けて準備する。

⑤ **実行する**

学級目標達成診断タイムで把握した Keep・Tryを意識して、学級目標を達成するための活動提案を実行する。

⑥ **振り返る①（個人目標に関わる）**

学級目標達成カルテを活用し、個人目標が達成できたかどうかを振り返る。

また、学級全体やグループでの Keep や Try の取り組みについて、個人の学級目標達成カルテにまとめる。

⑦ **振り返る②（全体目標に関わる）**

学級目標達成カルテを活用して、学級目標の達成について友達や教師に報告し合う。それに対して、コメントを書いて認め合う。

最後に学級目標を視覚化・数値化した掲示に自分が達成できたと思う全体目標に加算する。

V **1学期の実践（○：成果 ●：課題）**

1 **「学級目標をつくる良さを実感しよう」**

図8のような仮の学級目標を提示した。



【図8 仮の学級目標の掲示】

共同体感覚の3つの要素を構成した仮の学級目標を達成するためのアクティビティを3つ行った。アクティビティ成功後に振り返りをして、共同体感覚の3つの要素の良さや学級目標づくりの必要性を考える機会をつくった。

(1) 所属感・信頼感の良さを実感するために

仮の学級目標「みんなで参加して楽しくやる」を大切にして「惑星旅行」を行った。「惑星旅行」とは、「歌に合わせて、惑星（フラフープ）の間を自由に動きまわります。歌の途中で『ブラックホール』と言ったら、惑星（フラフープ）に逃げよう。必ず両足を入れよう。」と伝え、ブラックホールが来るたびにフラフープを12→10→8→6→4→2→1と減らしていく活動である。

最初はアイデアが出ず困っていたが、最後は下の写真のように全員が1つのフラフープに座っても両足を入れてくっついて入ることに気が付き、アクティビティを成功させた。（写真1）



【写真1 惑星旅行の活動の様子】

活動後、「なぜ男女がくっつけたか」を視点にして振り返った。

○：「みんなと協力して成功させたかった」・「達成するために男女関係なく信じあえた」という発言や姿があり、所属感・信頼感の良さを実感できた。

(2) 貢献感の良さを実感するために

仮の学級目標「一生懸命やる！最後まであきらめない」を大切にして「ヘリウムリング」を行った。「ヘリウムリング」とは、人差し指の上にフラフープをのせ、目の高さの位置から順にフラフープを床に降ろしていく活動である。難易度が高く、何度も失敗していたが、他のメンバーの動きにも注意しながら個々が集中して取り組み、最後は見事成功させることができた。（写真2）



【写真2 ヘリウムリングの活動の様子】

活動後、「課題を達成する中で自分や友達が貢献したこと」を視点に振り返った。

○：「プラスの声掛けがあるから、目標が達成できたと思う」「一人一人の役割があったからできた」のように「自分の役割がある良さ」や、「自分の役割を貢献する大切さ」に気付く記述が見られ、課題を達成していく上での貢献感の良さを実感できた。

(3) 自己受容の良さを実感するために

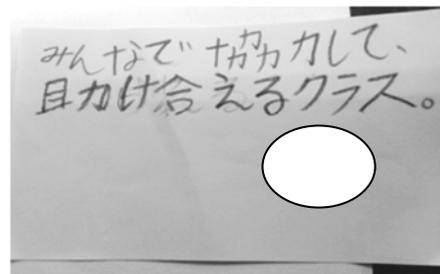
「自分を認め、自分を大切に」を大切にして、「リフレーミングワーク」を行った。リフレーミングとは、見方を変えるという意味で、自分の性格の短所、苦手なことを発表し、教師や友達から長所へ変えてもらうという活動である。最初は自分の短所を長所に変えることに抵抗を示す表情が見られたが、変えてみるおもしろさに気付き、積極的にリフレーミングを試みていた。活動後、「見方を変えてみて良かったことは何か」を視点に振り返った。

○：「自分の良さを見つけると思わず笑ってしまった」「自分が好きになれる」という発言や記述があり、自己受容の良さを実感できた。

2 「みんなで学級目標をつくろう」

(1) 全員の願いを3つの要素に分類をする

これまでのアクティビティカードを振り返りながら目指す小目標を考え、付箋に書き込んだ。共同体感覚の「所属感・信頼感」・「貢献感」・「自己受容」の3つの要素に子どもが分類するのは難しいと判断し、教師が分類した。



【写真3 目指す小目標の書かれた付箋】

「所属感・信頼感」と関わる小目標には、「協力して助け合える」や「みんなで協力し合って信頼のできる」などの友達の関わりに関する意見が挙げられた。

「貢献感」と関わる小目標には、「何事にも1人1人が貢献していける」や「一人一人が何事にも貢献する」などの自分が役割をもって課題に取り組んでいこうとする意見が挙げられた。

「自己受容」と関わる小目標には、「笑顔あふれる」・「いつも笑顔がたえない」・「自分の良さを見付けて笑顔になろう」という自分や互いの良さを見付けていこうとする意見が挙げられた。

分類した小目標は子どもたちが考えやすくなるように学級通信で紹介し、共同体感覚の3要素別のグループ編成をし、ホワイトボードを活用してまとめさせた。全員の記述した願いを入れつつ、共同体感覚の3つの要素を入れて、資料1のように決まった。

「楽しく協力し、助け合う」 (所属感・信頼感)
 「何事にも貢献して全力で頑張る」 (貢献感)
 「一人一人がいつも笑顔で元気あふれる」 (自己受容)

【資料1 決まった小目標について】

○: 共同体感覚の3つの要素という指針があることで、教師の目指す学級像と子どもの目指す学級像の方向性をそろえることができた。

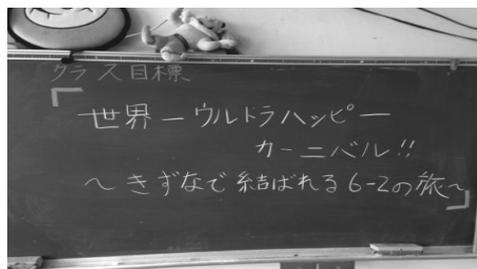
(2) 作った小目標をもとに、大目標をつくる

写真4のように班ごとに分かれ、学級通信を見ながら小目標をまとめ、大目標を考えさせた。



【写真4 学級通信を見ながら話し合う様子】

全員が発言することを意識して、ワールドカフェ方式の話合いで大目標の案を考えた。その結果、「6-2! 笑顔のカーニバル」・「きずなでつながったクラス」・「世界一ウルトラハッピークラス」・「自分の良さにみんながきづく旅」の4つの案に分かれた。これらを生かすため、学級委員から「みんなの4つの案をまとめてみたい!」という意見が挙がり、自然と教室内に拍手が起き、4つの案の折衷案を大目標にすることが決まった。



【写真5 4つの案をまとめた大目標】

話合いの結果、写真5のように「世界一ウルトラハッピーカーニバル 〜きずなで結ばれる6-2の旅〜」という大目標に決まった。

振り返りには以下のような記述が見られた。(資料2)

☆ カーニバルの意味を調べると、お祭りです。お祭りはワイワイやるので楽しいクラスになる。
 ☆ 4つの案があがりました。2つはワイワイ笑顔系、2つは感動系で、どう合わせるか悩みました。意見を出し合って、いい学級目標ができました。
 ☆ 僕は、自分の力を出しきって、3つの目標を達成しながらお祭りのようににぎやかなクラスにしていきたいです。

【資料2 学級目標づくりの感想】

資料2の感想から、「にぎやかで楽しいクラスを目指すこと。その結果として6-2のみんなの絆が結ばれていくようにしたいという願い」が込められている。

- : 小目標を基に考えることで、話し合う内容の焦点化を図ることができた。
- : 大目標のキャラクター化を子ども主導で行うことで、共同体感覚の3つの要素で構成された小目標を達成していこうという意識を高めることができた。
- : キャラクター化した大目標と共同体感覚の3つの要素を入れた小目標との関連性を見だしにくい点が課題に残った。

(3) 学級目標のキャラクター化と掲示

作った学級目標を学級内で定着していけるようアイデアを出し合い、資料3のようにABCのグループごとに分担して作業を進めていった。

- A 個々に目標を意識させる掲示物をつくる
- B 学級目標の歌の掲示物をつくる
- C みんなが達成をイメージできるように、学級目標をキャラクター化した掲示物をつくる (視覚化・数値化した掲示)

【資料3 掲示づくりの分担について】

Aグループは、いつも学級目標を意識することができるよう机の上に学級目標の写真をラミネートして貼った。(写真6)



【写真6 机上の学級目標】

Bグループは、学級目標をイメージする歌を選び、歌詞とイラストを模造紙にかき、教室に掲示した。



(写真7)

【写真7 歌詞の掲示物づくり】

Cグループは、グループの中で学級目標を達成していく過程と達成後のイメージを、ノートに書いて意見を出し合ったり、グループ以外の仲間に相談したりして掲示づくりを進めた。(写真8)



【写真8 Cグループが活動する様子】

そして、みんながロケットに乗り、ゴールを目指していくイメージを共有した。課題となっていた大目標と小目標の内容の関連性も、達成していく小目標の項目それぞれに祭りを連想させる「ちようちん」・「うちわ」・「お面」を当てはめることで、みんなで「世界ウルトラハッピーカーニバル」を作っていくという物語がイメージできるようにした。

しかし、最初は目指すゴール像について十分な合意形成のないまま、一部の子どもを中心に作業を進めようとしたため、グループ内で対立が生まれた。そこで、対立し合う子どもの中に入り、「3月にどんな姿になっているのか想像してみよう。」と助言した。

その結果、子どもたちは何度もグループで相談して、「絆が深まる6-2の旅」に注目し、32人と教師の紙人形を作り、全員の絆が深まって手をつないでいる姿をゴールとして表現した。(写真9)



【写真9 完成した学級目標の掲示】

○: トラブルを乗り越えながら学級目標の掲示をつくることで、早く学級目標を達成していきたいという意欲が高まり、強く学級目標を意識するようになった。

3 「赤星っ子夏祭りを成功させよう」

(1) つかむ (課題の把握)

掲示を作成したのちに、どうやって学級目標を達成していくかを決めた。「赤星っ子夏祭り」において、学級で出し物を企画し、運営する中で学級目標を達成していくことに決まった。

(2) 深める① (全体目標に関わる)

「学級目標達成チャレンジツール」(写真10)

を生かして、どの企画が小目標を達成できるかを考えて、話し合った。活動提案の原案では「おぼけやしき」・「なぞときおぼけやしき」・「からくり脱出ゲーム」・「投球スナイパー」等が挙げられた。



【写真10 板書構成】

これらについて「貢献」・「笑顔」・「仲よし」の小目標の観点のどれが達成できるか話し合った。最初は、発言力のある数人の子どもの意見が多かった。それぞれがやりたい提案とその理由を話す中、話し合いが停滞したところで相談タイムをとった。相談タイム後に、全体目標との関連付けをより重視して話し合わせたところ資料4のような話し合いの場面が起点となり、活動提案が決まっていた。

- C1: 投球スナイパーでは、店番をしたり、準備をしたりしている時に「貢献」することができず、学級目標を達成できない。その代わりに、「おぼけめいろ」などのほうが「貢献」できると思う。
- C2: それなら「おぼけやしき」・「おぼけめいろ」「クイズめいろ」を合わせて、「なぞときおぼけメイロ」にしてみてもどうだろうか。
- C3: おぼけを怖くすれば、みんなと「助け合い」をしていけるので、盛り上がっていくからいいと思う。

【資料4 話し合いの場面における発話記録】

C1・C2・C3は、最初は「投球スナイパー」がやりたいと思っていた。しかし、全体目標の「貢献」・「助け合い」を達成できるかどうかを考えていく中で自分の考えを変えて建設的な意見を述べるという姿が見られた。この話し合いの結果「なぞときおぼけメイロ」を赤星っ子夏祭りで行うことに決まった。

- : 全体目標を意識した話し合いを深めたことで、子どもたちがどんな個人目標を設定し、達成していけば良いのかについて見通しをもてた。

(3) 深める② (個人目標に関わる)

「なぞときおぼけメイロ」の実施に向けて準備を始める際に、「学級目標達成カルテ」を作成した。Keep、Problem、Tryの3項目を、それぞれ「かったこと・続けていくこと」、「問題点・困ったこと」、「やってみよう」という言葉にして、子どもに分かりやすく紹介した。

「学級目標達成カルテ」の作成にあたっては、全体目標の3つの要素を満遍なく達成するような個人目標を「やってみたいこと」として付箋に書くよう促した。そして、それを確認してから準備作業に入るようにさせた。準備を終えた後には、準備前に書いた「やってみたいこと」の付箋を見ながら振り返り、「よかったこと・続けていくこと」または「問題点・困ったこと」の欄に分類して貼り直させた。「問題点・困ったこと」の内容に対しては、新たに「やってみたいこと」として改善策を挙げた上でリハーサルに臨ませた。

付箋に書かれた個人目標には、衣装や道具づくりなどについての「貢献」に関わる内容と、友達への励まし方や助言の仕方などについての「助け合い」に関わる内容が多かった。

●：「貢献」と「助け合い」を達成する個人目標が多く、「自己受容」が少なかった。

(4) 学級目標達成診断タイム

リハーサルを行った。子どもたちはそれぞれの個人目標を意識して「なぞときおぼけメイロ」を自分たちで試してみた。(写真11)



【写真11 リハーサル】

活動後に各自の「学級目標達成カルテ」を使い、リハーサルを振り返った。K P Tの各欄にそれぞれ貼られている付箋を1枚ずつ確認しながら、本番に向けて貼り直すとともに、新たにやってみたいことを付箋に記入し、Tの欄に追加していた。(写真12)



【写真12 リハーサル前後の学級目標診断カルテ】

その後、活動別の班で「学級目標達成カルテ」の中から達成された個人目標を各自が発表し、その付箋をホワイトボードにまとめた。(写真13)

さらに全体で各班の成果や課題について発表し、その内容について話し合った。(写真14)

話し合いでは、深める②と同様に「貢献」や「助け合い」に関わる個人目標達成への助言が中心であった。診断タイム後の振り返りでは、以下のような記述が見られた。(資料5)



【写真13 班でまとめたボード】



【写真14 助言する様子】

- ☆ クイズが難しすぎたので、パソコンで簡単なクイズを調べたり、ヒントを出したりしました。
- ☆ 迷路の行き方を間違えることに関しては、分かりやすい矢印や前より少し簡単にしました。
- ☆ 新聞の予備を持ってきて、4枚ぐらい重ねてカーテンにしました。すごく参考になりました。

【資料5 診断タイム後の振り返り】

○：改善案を否定的に捉えることなく、学級目標を達成していくための意見として肯定的に捉えた。

(5) 実行する

赤星っ子夏祭り当日は1年生とペアになり、他学級の店を回ったり、運営をしたりした。学級目標診断タイムで挙げられた課題を修正し、円滑に活動を進め、「なぞときおぼけメイロ」を楽しく実施した。(写真15)



【写真15 1年生に優しく接する姿】

(6) 振り返る①・振り返る②

赤星っ子夏祭りを終え、学級目標達成カルテを使って、個人目標と全体目標の達成を振り返った。全体目標の達成については、達成できたと思う小目標に対して、一人1ポイントずつ掲示物に加算し、達成度を可視化した。(資料6) (写真16)

- ☆ 一人一人が、入ってきた人をおどかすことができたので全員が貢献できたと思います。(貢献感)
- ☆ 新聞が破れた時、みんなで協力して直せたのでこれを選びました。(所属感・信頼感)

【資料6 振り返る①・②における記述】



【写真16 学級目標達成カルテと掲示で振り返る様子】

○：全体目標に関わる個人目標を立て、その達成を目指して活動した過程を振り返ったことで、自分やクラスの高まりを客観的に捉えることができた。

4 1学期の実践の検証と今後の方向性

4月と同様の質問紙調査を行い、その変容を表2にまとめた。

【表2 学級の共同体感覚に関する調査 4月と7月】

	所属・信頼感	貢献感	自己受容	学級目標
4月	4.2	3.6	3.8	4.0
7月	4.6	4.2	4.0	4.8

共同体感覚の3要素、学級目標に対する意識、どの項目の数値も伸び、各項目同士は高い相関関係を示した。共同体感覚では「所属感・信頼感」と「貢献感」の伸びが著しい。子どもたちが1学期に特に達成を目指した小目標の要素が、この2要素に関わるものであったためと考える。また、「自己受容」の達成を目指す子どもは少なかったが、結果としては伸びた。これは、視覚化・数値化した掲示や学級目標達成カルテの付箋が増えることで、自分の良さを発見したり、認められたりする機会があったためと考える。2学期は、「自己受容」の達成に向けて、子ども同士が認め合う活動を十分行えるよう、振り返りの時間充実させていくこととする。

VI 2学期の実践 (○：成果 ●：課題)

1 「6年生の秋祭りを成功させよう」

(1) つかむ・深める①・深める②

2学期の始業式後、子どもたちの日記には、頑張りたいこととして、「学級目標」を達成したいという記述が多く見られた。



【写真17 提案を考える様子】

そこで、深める①として、今後学級で行う企画を考えた。(写真17)そして、出された提案を基に話し合った。(資料7)2学期には学年全体で「ハロウィンスポーツ大会」、3学期は「池清掃と逃走中」を行うことに決まった。

- C1：学級目標を達成するため、みんなが納得できる意見にしたい。「助け合い」につながるよ。
 C2：「池清掃」は学校のために卒業が近い時期にやりたいね。「逃走中」のミッションに入れて、学級で行うことが学校のためになるようにしてみたらどうだろう。
 C3：学年で行事を企画したことがないし、秋といえばハロウィンだから、「ハロウィン」と「学年スポーツ大会」を合わせて行って、学年を盛り上げて「貢献」を達成したい。

【資料7 話し合いの場面における発話記録】

- ： 1学期から継続して学級目標の達成を目指して活動してきていることで、全体目標（特に小目標）の達成を意識した活動内容の提案が自然にされるようになった。また、全体目標を基にした個人目標の設定も、教師が細かく指示したり確認したりせずに行えるようになった。
 ○： これまでの活動を通して得られた、共同体感覚の高まりによって、子どもたちはその活動範囲を、学級（1学期）、学年（2学期）、学校（3学期）と広げようとしていた。

(2) 学級目標達成診断タイム

学級目標達成診断タイムは、「学年ハロウィンスポーツ大会」で仮装をして競技を行えるかどうか、ルールが運営上成立するかどうかを確認するという観点で話し合った。また、活動を通して「貢献」「助け合い」「笑顔」の個人目標が達成できるか、どう改善すればよいかを「学級目標達成カルテ」を活用して話し合った。

(3) 実行する：

「ハロウィンスポーツ大会」では、他の学級に競技内容やルールへの意見を求めたり、審判を頼んだりして、学年全体の行事となるよう配慮する姿が見られた。当日は、各学級の要望を基に決めた「バスケットボール」・「レクリエーションリレー」・「ハンドボール」を学級対抗で行った。また、仮装して応援を行った。(写真18)競技の結果は、本学級が優勝することになった。



【写真18 仮装したり、説明したりする様子】

(4) 振り返る①・振り返る②

学級目標達成カルテを活用した個人目標の振り返りの前に、自分が達成できたことを発表し、さらにグループ内で良かったことを付箋に書き、認め合い活動を行った。個人目標の達成感を味わえるように十分に時間を取って振り返った。

- ： 優勝以上に、運営における個人目標の達成について喜ぶ記述が多く見られ、目標達成に向けて活動する意識の高まりが感じられた。
 ○： 自分や友達が達成できた個人目標が何か、学級目標との関連を意識しながらじっくり考えることで、自己受容の機会になった。

Ⅶ 本実践の検証・課題

1 集団としての変容

4月と同様の質問紙調査を行い、その変容を表3にまとめた。

【表3 学級の共同体感覚に関する調査 4月と12月】

	所属・信頼感	貢献感	自己受容	学級目標
4月	4.2	3.6	3.8	4.0
12月	4.6	4.0	4.1	4.6

共同体感覚の3要素、学級目標に対する意識、どの項目の数値も伸びた。共同体感覚の3要素と学級目標に対する意識の間には相関が見られ(特に所属感と学級目標に対する意識の間には相関係数が0.85という高い相関が示された)。このことから、共同体感覚の3つの要素を取り入れた学級目標を定め、その達成を目指して活動していくことは、共同体感覚を高めることに有効であることが分かる。学級目標を活用することで、育てたい社会性を獲得させていくことができることが実証され。また、小学生版共同体感覚尺度を用いて、授業実践による共同体感覚の高まりを検証することができた。

2 個の変容(抽出児童)

昨年度A児とB児は、それぞれ年間65日、47日の欠席をしていた。A児は学校外に遊びに出かけることが多いことを原因で、B児は親子関係や学級での居心地の悪さが原因で欠席していた。本実践が行われた本年度、2人の欠席は2学期を終えた段階で、それぞれ12日、0日である。

【表4 抽出児の共同体感覚に関する調査 4月と12月】

		所属・信頼感	貢献感	自己受容	学級目標
A児	4月	5.0	4.4	4.5	4.0
	12月	5.0	4.7	5.0	5.0
B児	4月	5.0	3.8	3.2	2.2
	12月	5.0	3.4	3.5	3.8

A児は、「学校へ行きたいと思えている。クラスでやることがあって、それができると楽しい。」「『貢献』の達成を意識して、1年生におどかしかたを紹介したり、準備を率先して手伝ったりすることができた。」と1学期を振り返った。また、10月上旬には児童会役員に立候補し、今の自分の成長と学校の成長をつなげたいと演説し、見事当選した。共同体感覚の「貢献感」「自己受容」「学級目標」の数値の伸びからも、学級のために自分が役立てる喜びを感じていることがわかる。課題は、自己評価基準を基本的に低くする傾向があるため、適切な基準を示し、自己の成長をより感じさせたい。

B児は、「5年生の頃は学校に行くのが面倒だっ

たが、今は学校が楽しい。学級目標を達成するためにみんなと企画して、自分自身が前向きになった。このまま頑張りたい」「赤星っ子夏祭りでは、率先してお化け役を行い、積極的に友達と関わられた。」と1学期を振り返った。11月中旬には、5年生の頃の嘘を修正したいと相談してきた。理由を問うと「自分は6年生で変わってきている。5年生の自分がついたウソを変えたい。」と述べた。学級目標の達成への意欲が、登校への意欲につながるとともに、ありのままの自分を認める自己受容の伸びが、よりよい自己へと変革しようとする意志を生み出していると考える。課題は、貢献感を高めるため、リーダーとして活躍することが貢献であるというB児の固定観念を変え、フォロワーとしての活躍も貢献となることを伝えたい。

抽出児童の姿及び共同体感覚尺度の数値の変容から、個々の抱える生活や人間関係の課題が、学級目標を活用して共同体感覚を高めることによって解決されることが示された。

そして、共同体感覚が高まるほど、「よりよい生活や人間関係を築くことができる子どもの育成」につながると考える。

3 今後の課題について

今後の課題は2点ある。1点目は、「所属感・信頼感」「貢献感」に比べ、「自己受容」を学級目標と関連付けて考えることは、子どもにとって難しかったことである。2点目は、「よりよい生活や人間関係」や「達成を目指していく学級目標」が、子どもの発達段階によって異なるため、活動と成長へのつながりを検証することが難しかったことである。

今後は、質的研究の方法も学び、学級目標や共同体感覚の与える子どもたちへの影響について研究を深め、より適切な支援ができるようにしていきたい。

<参考文献>

- 1 会沢信彦・岩井俊憲『学級担任のためのアドラー心理学』,2014
- 2 高坂康雅『共同体感覚尺度の作成』教育心理学研究,2011,59,88-99
- 3 高坂康雅『小学生版共同体感覚尺度の作成』教育心理学研究,2014, 84,596-604

(付記)教職大学院という学びの場を与えてくださった、名古屋市教育委員会にお礼を申し上げます。また、前任校名古屋市立栄小学校前校長加藤文雄先生、勤務校名古屋市立赤星小学校前校長小崎安茂先生、現校長大島寿恵先生をはじめ、教職員の皆様には温かいご協力をいただき、感謝しております。さらに、愛知教育大学教職大学院の瀧田健司先生、川北稔先生をはじめ、諸先生方にはご指導ご助言をいただきました。教職大学院で学んだことを、名古屋市の教育に還元できるよう、今後も研究を進めていきたいと思っております。